

KAGRA観測体制



プロジェクトとしてまだ何も決まっていない状態ではあるが、観測時のオンサイトの情報を効果的に活用できれば、より高い質のデータ解析を行うことができる。つまり、データ解析中に「なんだかわからないが、このトリガーイベントは装置由来だろう」といった状況が減る。

観測データの質の管理を大きなタスクとするdetcharグループは、観測体制についてどんどん提案していきたい。

検討

- データの質に関する多くの情報は現場にローカライズされている。各種モニタはそれを引き出すためのものでもあるが、十分ではない。例えばマイクロフォンで設置場所付近の音響雑音であることは分かっても、その音源の特定と対策は現場に行かないと困難であると想像する。また、新たに必要なモニタも出てくるだろう。このローカライズされた情報をどのように記録・活用して、データの質の管理に役立てるか。
shift DQ flag、ログブック、解析ソフト、マニュアル、チェックリスト、...
- **detchar**システムの改善：モニターツールは十分か？より有効なツールは？
- 大きなグリッチのスタディ：大きなグリッチはそもそも出現する事自体が問題なので、なるべく早い段階で、取る事ができる対策を施したい。またその経験を雑音源特定システムに反映したい。どのようなスタディをするか？きちんとしたスタディプログラムを作らないと暇つぶしになってしまう。
- イベントアラート：マルチメッセージ観測を行う際、最終的にはアラートはシステムとして自動化されるべきだが、初期は手動になるだろう。その際の体制は？
- **detchar**では多チャンネルを駆使して自動的に雑音源を特定して行く事を一つの大きな目標としているが、それは現実には生易しいものではないと考えている。少なくとも初期（おそらくずっと）は多チャンネル解析だけでなく、手動による雑音源特定と、その情報を多チャンネル解析に反映させて雑音源特定の自動システムの改善を測るとった、実験→解析、解析→実験の双方からのアプローチが必須となると考えている。